

福島県広野町の新設校。県立ふたば未来学園高校には明確な目標がある。福島島の復興を担う人材の育成だ。「原発と福島」第20部。開校1年前に、東京電力福島第一原発事故と向き合う1期生たち取材した。

原発と福島

未来のために①

原発周辺の子供はよく、こんな小言を耳にして育った。「ほら、東電に就職できるとにちゃんと勉強しな」と。1年2組の新妻竜輝(16)もその一人だった。各地で巨大な原発を伺



誇りに携わる父に 廃炉に

基も動かす大企業。仰ぎ見るようなその「立派な会社」がしかし、2011年3月、前例のない大事故を起こしたのだった。

竜輝は当時、浪江町立野小の5年生。家族と県内外4か所を転々と避難するうち、6年生になっていた。いわき市にある避難者用の借り上げマンションに落ち着いたのは6月下旬。そのまま市内の小学校に転入し、中学に進んだ。



父親と談笑する竜輝さん(1月17日、福島県広野町の自宅で)——源幸正倫撮影

震災5年

竜輝や妹たちが起きる頃、父(36)は家にはいない。夜明け前に起きて福島第一原発に向かうのだ。勤務先の工事会社は東電の下請け。敷地内の配管の仕事をもらっている。ことあるごとに「東電に就職できるよ」と……と言っていた母(36)が、息子へのいじめを気にし、父の仕事を伏せて暮らしている。竜輝は「父親が原発で働いていることは外では言っていないけど、受けてはいけな

昨年進学したふたば未来学園高校には「演劇」の授業があった。4クラスの計20班がそれぞれ取材を基に脚本を作り、演じる。テーマは復興。広野町役場、県

県立ふたば未来学園高校 1期生は152人。原発がある福島県双葉郡の8町村出身者が7割ほどを占める。授業には、復興を考える「ふるさと創造学」や、被災現場でのフィールドワーク、各分野の著名人を講師に招く時間もある。進学コースのほか、スポーツや農業などの専門科目を重視したコースに分かれる。2019年度から中学校が併設され、中高一貫校となる予定。

土木事務所、病院など10か所で取材の了解が取れている。竜輝の班6人は、地元「Jヴィレッジ」にある東電復興本社を選んだ。6月に訪問した。応対したのは代表の石崎芳行(62)だった。いきなり「迷惑をおかけし、大変申し訳ありません」と頭を下げてきた。竜輝たちは戸惑いながら、廃炉作業の実態を聞いた。現場で使う防護服を見せられた。「放射線量が高い場所では、この防護服や全面マスクを身に着けま

す。石崎は悩みも打ち明けた。「廃炉作業以外にも、住民の相談窓口の担当もいます。ただ、住民との対応に苦しみ、辞めてしまうケースもあるのです」

どれも初めて聞く話ばかりだった。「頑張って働いている人のことを何も知らなかった」。竜輝はがくせんとした。同時に、いつもへとへとになって帰ってくる父の、現場の防護服が浮かび、胸が熱くなった。

本番が近づいた7月の稽古中、竜輝は思い切った打ち明けてみた。「俺のおやじ、原発で働いているんだ」。わかってほしかった。現場では、誰もが一生懸命働いているのだと。みな驚いた表情を見せたが、冷たい視線を向ける仲間はいなかった。「役が逆だったかな」。そう言っ

た。あれすじと配役が決まった。竜輝は、原発事故で仕事も故郷も失った「元会社員」になった。再会した同級生が東電で働いていると知り、怒りをぶつけるシーンがある。ただ、稽古を始めても、感情移入ができなかった。東電の下請けとして働く父親を持つ自分はどうしたらいい？

劇を披露する日を迎えた。竜輝は市内の体育館で、仕事を奪われた元会社員になりきり、気づくと、東電社員役の胸ぐらをつかんで詰め寄っていた。「お前らのせいで、こんなことになっているんだ」。会場は静まり返った。全生徒による投票で、竜輝たちの劇は20班のうち1位になった。過酷な廃炉の現場から戻ってくる父は、いつも疲れ果てている。復興のために誰かがやらなくてはならない仕事を、父はしている。「責任ある仕事に携わる父を誇りに思います」。竜輝はいま、はっきり言えるようになった。(敬称略)

原発と 福島

未来のために②

1年1組の大和田瑠華(16)は答えに窮した。「大人がお膳立てした学校だろ。君たちに何ができるのかな」。昨年6月、福島県広野町にある県立ふたば未来学園高校の視察にやって来た外国人留学生の質問は痛烈だった。
著名アスリートや宇宙飛行士らが講師に名を連ね、



作業員と共生する町に



学校近くの丘に仲間の部員と登った瑠華さん(左)。背後の白いビルの地下にメッセージを残したという(1月25日、福島県広野町で)一源幸正倫撮影

鳴り物入りで昨春開校した。広野で生まれ育った瑠華は、復興の人材育成という設立理念に共感し、入学した。部活は、自分で課題を見つけ、解決方法を考える「社会起業部」。2011年の原発事故の後、祖父母と両親、姉弟と一緒に隣の同県いわき市に逃げ、14

震災5年

年春まで避難生活を強いられた。「事故でバラバラになった住民の心をつなぐ活動」と考えていた。

しかし、視察が相次ぐ学校では、案内や説明役をたびたび任せられ、町のにぎわいのためだと、夏祭りの出店の店番をしたこともあない。思うような活動ができない。もがく日々が続いた。

空き家を借り、広野町に戻った住民が交流するカフェを作ろうと思いついたのは夏だった。借りられそうな建物を探し、10軒ほどの持ち主を捜し出して頼み込んだ。「家を貸す? あんたたちに?」。全て断られた。24人いた部員はその頃、10人ほどに減っていた。

それでも、瑠華たちは町を丁寧歩いたことで、広野の現実に触れていた。避難を続ける住民が多

く、空き家が目立つ反面、休耕田や高台に作業員宿舎が増えていた。コンビニ店は作業服姿の男たちで繁盛し、南北に延びる国道6号は朝夕、原発との間を往復する車で渋滞する。部活中に調べた数字は本当だった。町で暮らす作業員の方が町民の数より多いのだ。広野では、避難指示は出なかつたものの、大半の町民が自主避難し、約5100人の町民のうち戻ったのはまだ2400人ほど。一方、町内で暮らす作業員は3000人を超えている。急激な流入に戸惑う住民は多く、町は14年12月から昨年3月にかけて、防犯カメラを学校周辺など24か所に取り付けた。町が防犯カメラを設置したことは過去例がない。母(39)も、一人の外出は控えるように、と言った。「廃炉の仕事をしてくれ

ている人たちなのに」。複雑な気持ちでしていた瑠華は昨秋、部活の講師として招いた会社社長の話にはっとした。「作業員だって広野の住民だよ。町の将来のために共生を考えないといけない」
作業員のプレハブ宿舎が増えていく町を友達と歩いた。商店主や町職員を訪ね、復興にかける思いを聞いた。そんな活動を続けるうち、瑠華は、様々な人の顔が見える「住民マップ」を作りたいと思うようになった。最長40年という廃炉に携わる「新住民」の作業員たちも登場する地図だ。

学校近くに町を一望できる丘がある。瑠華はここでよく、友達とおしゃべりしたり、一人で考え事したりする。瑠華がJR広野駅前建設中の6階建てのビ

ルを指さす。廃炉事業関連の事務所などが入る予定のそのビルの地下に、ちょっとした秘密があるのだ。

瑠華たちは2か月ほど前この建設現場を見学し、案内役のゼネコンの担当者から、基礎部分の鉄骨にメッセージを、と促された。へふるさとをよろしくお願います。Vハ作業している人が安全に仕事出来ますように。Vハ私達が未来を良くするんで応援して下さい。V...。瑠華のペンは止まらなかつたという。

(敬称略)

原発と福島

未来のために③

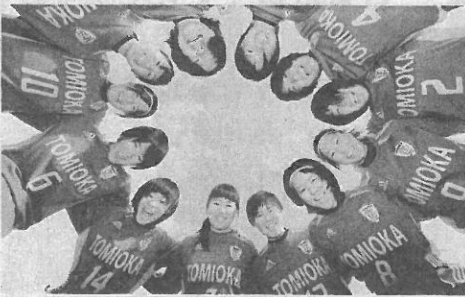
遠藤諒夏(16)の目には、

2011年夏のワールドカップ(W杯)ドイツ大会を制したなでしこジャパン以上に、その秋の東北大会を戦い抜いた福島県立富岡高校女子サッカー部が輝いて見えた。

東京電力福島第一原発事故で、富岡町にある同校も



「富高サッカー」引き継ぐ



円陣を組む富岡・ふたば未来学園合同チーム。左下の14番が諒夏さん(1月31日、東京都武蔵村山市で)＝工藤菜穂撮影

震災5年

移転を強いられ、部員は10人になった。公式ルール上、7人以上のチームなら試合を始められる。ただ、相手はピッチに11人いる。完全に不利な状況の中で、決勝まで戦い抜いたのだ。

「富高って、やっぱりすごい」。諒夏は当時小学6年、サッカー歴3年。自宅がある同県楡葉町からいわき市に避難していたが、す

ぐに練習を再開した。胸に大きく「TOMOKA」と入った青いユニホームに、強くあこがれた。

中学2年になった諒夏は、母(39)の話に落胆した。母によると、「富高」を含む福島県双葉郡の県立高5校は、15年度から新入生の募集を停止し、各校は16年度末で休校になるという。

原発事故で生徒が集まらなくなったためだ。

諒夏が暮らす浜通りと呼ばれる福島県沿岸部は、広野町と楡葉町にまたがって国内最大級のサッカー施設Jヴィレッジがあり、男女問わずサッカーが盛んだ。

その土地のサッカー少女にとって、スポーツ専門学科を構え、県内外からプロを目指す生徒が集まる全国大会の常連校「富高」は、特別な存在だった。

大きな目標を失った諒夏が、新設される県立ふたば未来学園高校の入学説明会に出たのは14年秋。うれしいニュースが待っていた。

広野町で翌春に開校するその高校は、休校になる5校を引き継ぐ役割もあり、女子サッカー部は富岡と合同チームを組むという。合同練習の頻度について、担当者への返答はあいまい。新設校の指導者も決まっていな

い。諒夏は、出願ぎりぎりでの結論を出した。あの青のユニホームで全国へ、と。

女子部員は諒夏を含めて2人だった。平日は、男子に交じってボール回しなどをしながら、セットプレーや試合形式の練習にはなかなか参加できない。福島市に移転した富岡高校の2、3年生計12人との合同練習は、たいいて週末になる。

顧問の女性教諭が運転する車で夜明け前に出発、3時間ほどかけてたどり着く。

チームとして練習する時間は限られている。それでも、プレハブ校舎前のグラウンドで合同練習に入ると、諒夏の意識は切り替わる。あこがれの先輩たちは、50分の走り込みをひたむきに繰り返している。各自30本。諒夏はがむしゃらに先輩の背中を追い続けた。

その富岡・ふたば未来合同チームが昨秋、東北大会2回戦で敗れた時、顧問の女性教諭は帰りの車内で、諒夏に語りかけた。「富高と一緒に活動できるのもあと1年だね。何かを受け継がないとね」

先月末、東京都武蔵村山市のグラウンド。チームは都内の高校との練習試合に臨んだ。諒夏はピッチから、

後半はベンチから、引退する3年生6人のプレーを目に焼きつけた。3-0での快勝。ホイッスルが鳴ると多くの部員が泣いた。諒夏はぐっと我慢した。

新チームは富岡の2年生6人と、諒夏らふたば未来の1年生2人。諒夏は引き継ぎたいと思う。泥臭く、逆境を走り抜くサッカー。ことあるごとく、先輩たちが口にしてきたあの言葉。

「『原発事故があったんだから、しょうがないよね』なんて、ぜったい言わせたくないよ」 (敬称略)